

J・S・ブルーナーの「教育論」における論構成 についてー心理学研究と教育への発言はいかに かわりうるかー

一、はじめに

J・S・ブルーナーは一九六〇年代のアメリカ教育界、教育研究の世界で最も話題にされた人物である。(1) 十数年経過した現在、ブルーナーの名は文献にもほとんどみうけられない。今日、歴史上の事実として、ブルーナーの「教育論」に対しどのような評価を与えることができるだろうか。またブルーナーの主張の中で今日もなお、評価すべき点はなんだろうか。一九六〇年代のブルーナーの役割に関して、それはきわものであったにすぎないとか、未来に悪い影響を与えたという評価も多い。また、ブルーナーが高く評価されるべき心理研究をおこなっているにもかかわらず、教育問題に対し、饒舌を続けたことを理由に、心理学者としての彼を批判する声も聞かれる。さらには、ブルーナーの心理学研究にはオリジナリティ

がないと酷評する者までいる。筆者はこれらの批判に直接とりあげて反論することはしない。なぜなら、それらの批判も時流に合わせたものが多く、その批判がこれらの教育研究のあり方、特に心理学研究との有効な関連を確立していくという点で生産的ではないからである。筆者は、もともと心理学者であったブルーナーが、一期にせよ彼の心理学研究に基づいた「教育論」を展開したことに注目したい。そこでその「教育論」が彼の心理学研究とどのような関連をもっているかを明らかにしたい。そのことによってはじめて、歴史上での、また現時点でのブルーナーの適切な評価を決める一つの手がかりをうるのである。それゆえ、本稿では、ブルーナーの「教育論」の論構成が心理学研究における発想やその展開とどのように関連をもちうるのか明らかにしたい。さらに、このブルーナーにおける心理学研究と「教育論」の関連を一つの事例として心理学研究は教育論(被教育

者の形成に関して、教授者を含む諸々の刺激要因は学習者とのようなかわりをもつべきかということについての論)の構成にどのような関連をもつか、またもつべきなのかについての一般論を構想したい。そしてこの作業を続けるにあたってつぎの二点を仮説としたい。

一、心理学における論構成は前述の意味での教育論の構成といくつかの点で共通性をもつのではないか。

二、にもかかわらず、教育論の論構成は心理学研究の成果(検証結果)にだけ依拠することはできないのではないか。

右の二点を明らかにするためには、心理学研究と教育学研究を比較しうる共通の視点が設定されなければならぬ。そこで筆者はブルーナーの諸研究についてのメタ理論を立てることを考えた。つまり、それはブルーナーの諸理論がどのような視点から、どのように構成されたかを明らかにするための理論を考えることである。

前述の比較研究の事はいくつかの困難をともなう。第一に、ブルーナーの多数にわたる多方面の研究物から、どのようにして教育上の見解を他の見解と区別するかである。教育研究者の間ではよく「ブルーナー理論」といういい方をする。そこでこの用語法にならって「ブルーナ

ー理論」なるものを仮定することにしよう。ではどのようにして、その「理論」を明らかにできるだろうか。実のところ、「ブルーナー理論」をブルーナーの諸研究から再構成することは大変困難である。なぜなら、ブルーナーの教育に関する発言に限定して「ブルーナー理論」を構想するというやり方が通用しないからである。そこには、教育的発言とそれ以外の発言とを区別する確かな基準がない。かりに心理学研究に属するものと、教育研究に属するものとを、掲載雑誌、表題、引用文献、研究手続、研究対象(例えば、動物を対象にしていること)などから区別できたとしても、心理学研究の成果があるいはその研究方法が教育上の発言としての含意性をもたないとはいいきれない。心理学研究と教育研究を図書分類法のように区分し、それに従って、ブルーナーの「教育理論」を構想することは、ブルーナーの影響を理論的に明らかにするという課題に対して生産的ではない。なぜなら、筆者の目的は、ブルーナーの諸見解について検討し、ブルーナーの発想のしかた、さらには論構成の仕組みを明らかにすることだからである。ブルーナーについて研究する場合、心理学研究を無視して「教育理論」を構想するわけにはいかない。たしかにブルーナーは心

心理学研究から独立した「教授理論」の必要性を強調した。⁽³⁾しかし、そうした「教授理論」の構成そのものが、彼の心理学研究の方法論と関連をもっている。したがって、かれの心理学研究の全体を分析し、彼の論構成の特色を明らかにすることがまず必要である。

ブルーナーの教育研究と心理学研究を比較する場合の困難の第二は、彼の研究内容が時代とともに大きく変わっていることである。たとえば、一九六五年以降のブルーナーの研究の方向は一九六〇年―一九六五年頃のカリキュラム研究に比べ、大きな変化を示している。こうした彼の研究の変化は彼の論構成それ自体の変化を示すものなのか、それとも時代の変化に対する発言の上での適応でしかないのかが明らかにされなければならない。そのためにも、教育についての発言が最も多かった一九六〇年代だけを抽出して、ブルーナーの教育論を考えると研究方法は適切ではない。それゆえ、ブルーナーの心理学研究の軌跡をたどりながら、各々の時期にブルーナーが研究にあたって、どのような論形成をしてきたか、そしてその中で教育問題への発言がどのような視野から生まれたのかを明らかにする必要がある。

二、ブルーナーの心理学研究や

その他の研究の分析視点

心理学上の諸研究やその他の研究の成果は教育上の諸問題を解決するためのなにかの勧告を含むとしても、つねに明確な勧告を含むとはかぎらない。本稿においてブルーナーの心理学研究を主として分析対象にするのは、そうした勧告をひきだすためではない。ここで主としてブルーナーの心理学研究を分析対象にするのは、既にのべたように、ブルーナーの論構成を明らかにするためである。心理学研究における論構成は一般に、研究対象となる人間の行動や「思考」「人格」等についてなされる。だから、そうした論構成のしかたは、教育の対象である被教育者について構想するときの思考モデルとなるはずである。ここではそのような意味で心理学研究の論構成から検討する。そこでブルーナーの論構成を分析するための基礎的カテゴリーをつぎのように設定した。

一、実証的研究

- (1) 実験研究、一定の仮説のもとに条件を制御するような物的装置を用意し、その条件の中で、動物や人間の行動を観察し、行動の因果関係をさぐり、

そのためのデータを収集することによって仮説の妥当性をたしかめる。

(ロ) 観察研究、一定の仮説のもとに、観察視点を設定し、かつ観察方法を統制して、観察事実を収集することによって仮説の妥当性をたしかめる。

(ハ) 調査研究、一定の仮説のもとに、質問事項を設定し、特定数の人間に問うことによって、その答から仮説の妥当性をたしかめる。

(ニ) 事例研究、特定の観察対象（人間、動物）を設定し、その行動をできるかぎり観察記述することによって、その対象の行動記録を日記風に収集する。

(ホ) 統計的研究、(ロ)、(ハ)で見いだされたデータを統計的に処理することによって新たなデータやデータ解釈をひきだす。

二、右の一、の研究のしかたやその研究結果についての批判的研究、一についてのメタ言語系、たとえば、研究の様々な動向についてのレビュー、(心理学評論)

三、現実の教育問題、主として学校についての問題、子育ての方法に関する問題等について心理学研究の成果に基づいて言明したものを。ここで教育問題として

他の問題と区別する大まかな基準は、未成熟者が成人へと成長していく過程に対し、その成長に影響を与えることに関連する問題としておくことにする。一の(イ)のレベルの仮説「事実が教育問題に適用されたもの。

(イ)(ロ)のレベルで一般化されている内容(例、「転移」「動機づけ」)を教育問題の解決のための思考モデルとしたもの。

四、教育問題についての言明である点では三と同じであるが、この場合、心理学研究の成果や方法論との関連性を文面から読みとれないもの。

五、心理学研究との関連性が見いだされない点では四と同じであるが、教育問題についての言明に属さないもの(例、文化論)。

以上の五つの分類をブルーナーの心理学研究やその他の研究に適用することによって、ブルーナーの論構成の特色を明らかにしたい。

しかし、前述のように、ブルーナーの研究は年代により大きく異っている。そこで、右の分類カテゴリーを使いながら、さらに、ブルーナーの研究課題の相違によって、ブルーナーの研究経歴に対するつぎのような年代史的区

分を立てた。(4) ただし、ブルーナーの研究課題の方向が重複して二つの方向を示すことがしばしばなので、この時代区分は相互に重複している。

第一期（一九三九年～一九四〇年）実験心理学（動物実験）、心理学史（一の(イ)、二ノ注、番号は先の論構成分析カテゴリーを示す）

第二期（一九四一年～一九四六年）社会心理学（プロパガンダ、パーソナリティ、世論研究）、社会心理学方法論、社会科学運動論（一の(イ)、一の(ニ)、二、四、五）

第三期（一九四七年～一九五五年）社会心理学・実験心理学（知覚研究「ニュールック心理学」）、社会心理学（第二期の継続）（一の(イ)、一の(ニ)、二）

第四期（一九五一年～一九五九年）実験心理学（認知心理学—概念形成の研究）その他、（一の(イ)、二、三、四）

第五期（一九五九年～一九六六年）教育論、教授論、心理学評論（二、三、四、一の(イ)）

第六期（一九六三年～一九七八年）実験心理学（発達心理学、乳幼児の認知発達）心理学評論（動物心理学、文化人類学、言語学等との関連）、教育論、幼児教育論（一の(イ)、二、三、四）

以上の時代区分は、論構成のカテゴリーとブルーナーの研究上の問題意識の転換の時代を考慮して作られたものである。この区分に基づいてブルーナーの研究歴を概観すれば、ブルーナーの研究者としての独自性を明らかにすることができる。

ただ、心理学の場合、研究の手續において普遍的に共通な点が多い。また、実験などの手續上の都合から、研究者同志の共同の研究も多い。それゆえ、独自性とはいっても文章だけで思想の内容面での独自性を発揮する文献研究者と同様な方法で、ブルーナーの研究内容の独自性は語れない。むしろ、ここでは、先にあげた共同研究をも含めて、ブルーナーの研究にみられる論構成の特色を明らかにしたい。たとえ共同研究であっても、ブルーナーがその研究において論構成を共有したと考えることができるからである。先の時代区分を概観して気づくことは、各時代とも各々の時代を特色づける一の研究があるとともに、二のタイプの批判的研究がなされていることである。三ノ五はブルーナーの視野の広さを示すものである。

三、第一期における心理学研究の特色

この時期はブルーナーが心理学研究者として出発した時である。最初に発表された論文はつぎの二つである。

「メスネズミの性殖行動における胸腺摘出の効果」(B. カニングムとの共同研究)と、「ネズミの継続学習における電気ショックの効果」(6)この論文の中で後の論構成に大きな影響を与えるであろう点は見いだすことはむずかしい。これらの研究はきわめて生理学的実験であり、後のブルーナーの研究と連続していない。もし、連続する点をあえて見いだすとすれば、ここで、彼は、現代の実験心理学における実験設計やその結果の処理に関して基礎的訓練をうけたという点である。この基礎訓練は、やがて、戦争によって、彼が実験心理学から社会心理学に転進し、さらに戦後(第三期)、社会心理学の立場から知覚研究を始めたときに必要とされたはずである。というの、知覚研究は社会心理学からえられたモチーフを実験心理学的に検証していったものだからである。

後の彼の研究の論構成に影響を与えたと思われるのは、右の二つの論文よりも、一九四〇年にG・W・オルポットとの共同執筆で『心理学提要』(Psychological

Bulletin)にのせた「アメリカ心理学五十年史」である。(7)ちなみに、この論文はブルーナーがハーバード大学院生であった二十五才の時の論文である。(二のカテゴリーに属する。)

この論文は、それまでみられた学説史的なもの異なり、研究誌の論文の内容を検討し、研究者達の問題意識、理論的前提、方法、説明概念、心理学に対する考え方を詳細に規定しようとしたものだ。ブルーナーはいつている。もう少し具体的にいうと、一八八八年から一九三八年までの五十年間に発表された論文の中から代表的なものを選んで検討したものである。選択の方法としては、まず五十誌あったアメリカの心理学研究に関連した雑誌から評定尺度法によって十四誌を選び、そこに発表された一六二七の論文(書評、人物評をのぞく)を十年互に区分し、ブルーナーの立てたカテゴリーに従って分類し、定期的に心理学研究の動向がどう変わったかをみようとするとした。ブルーナーの立てた研究論文分析カテゴリーは、ブルーナーが心理学研究の論構成について早くから自覚的であったことを示すものとして注目すべきものである。そこでブルーナーの三十二項目の分析カテゴリーとそれをくくっている上位のカテゴリ

一を示すと、

(一) 研究対象 (1) 正常な大人、(2) 子ども青年、(3) 異常者、(4) 動物)

(二) 研究領域と研究の技術 (5) 生理学的実験、(6) 生理学的論文、(7) 非言語的反應によって研究される高度な精神過程、(8) 言語反應によって研究される高度な精神過程、(9) 標準知能テストにより研究される高度な精神過程、(10) 内省的研究、(11) 統計的方法の使用、(12) 社会心理学における実証的研究、(13) 社会問題、(14) 応用心理学 (主として教育心理学―筆者注)、(15) 文化への言及、(16) 動機づけの実証的研究、(17) パーソナリティの実証的研究、(18) 一つのケースを扱う論文、(19) 文献についての一般評論)。

(三) 概念化の仕方 (20) 精神、神経機能についての能力心理学的扱い、(21) 心理学のある学派への明白な支持、(22) 心理学のある学派への明白な攻撃、(23) 力動的 (ゲシュタルト的―筆者注) 分離、(24) 無意識的なものについての明白な宣言 (精神分析学的概念使用―筆者注)、(25) 心―身問題についての取扱い、(26) 全体として扱われる特定の精神過程 (実体論的精神論―筆者注)、(27) 構成概念として扱われる特定の精神過程。

(四) 方法論的諸問題 (28) 公理的、幾何学的方法、(29) 統計学的方法論、(30) 操作主義についての言及、(31) 心理学方法論の問題を扱う、(32) 公式的概念の分析。

以上、32のカテゴリを設定するにあたってブルーナーがどのような基準を立てたかは明らかにされていない。したがって、各々のカテゴリの相互関係や、それらのカテゴリによって構成されるブルーナーの心理学についての理論も明らかではない。しかし、帰納的に設定されたカテゴリを検討していくと、この論文においてブルーナーの心理学についての理論構想を推測することができる。

まず、(一)と(二)では、研究の対象や具体的な研究の手続、「研究領域」といったことばで区別されるものがあげられている。(1)(2)(14)(17)(19)、つぎに(三)では、心理学上の学派の違いを示す概念化の仕方に関係するものがとりあげられている。つぎに(四)では、(三)よりも、抽象度の高い、しかも学派に関係なく問われるであろう方法論の問題にかかわる論文がとりあげられている。この四つの大きなカテゴリは(一)と(四)へと抽象度の低いものから高いものへと設定されている。これを低いものから高いものへと関連を追っていくことによって、当時の心理学の動向に

ついでつぎのような点を指摘している。その点を筆者の立場で要約すると、

一、科学的研究方法（「批判的研究」ということばを使っている、量的基準に依存するものとのべている）の普及。

・研究対象として動物が増加したこと（1）番号はカテゴリー番号をさす。）

・生理学的実験とそれえの言及の増加（5）（6）

・非言語的方法で高度な精神過程を研究することが増加したこと（7）

・統計的手法の使用の増加（11）

・言語的方法の研究や内省法の減少（8）（10）

二、「批判的研究方法」の普及が心理学の諸々の研究領域と心理学以外の領域との間の区別を明確にした。

・社会心理学、応用心理学に前述の方法論上の厳格さが要求されるようになったこと（13）（14）

・社会問題や文化的要素への言及が心理学専門誌において減少したこと（13）（15）

・歴史的関心が減少したこと（19）

三、動機づけ論、パースナリティ論への関心の増大、ゲシュタルト心理学への関心の増大

・情緒の生理学、学習動機づけ論、フロイト、マグドウガル、ケンブラの力動説の関心にもとづく動機づけ論への関心（16）

・スタンレイ・ホールの影響によるパースナリティ論への関心の増大、しかし、臨床的事例研究はまだ普及していない（17）

・全体性の原理、「全体的自我」「文化的環境

（Cultural milieu）」「神経活動のレベル」といった用語使用にゲシュタルト心理学や現代生理学の影響がある（23）

・フロイトの影響はみられはするが、それはまだ十分にうけ入れられていない（24）

四、方法的にみれば、「実名論」から「唯名論」への移行がみられ、（7）（8）（20）（21）（22）（25）（26）（28）（29）（30）（31）（32）、さらには、論理実証主義の影響もみられる（28）（29）（30）（31）（32）。

・精神過程の能力心理学的説明の減少、本能説、脳中継説、象徴メカニズム説、説明原理としてのリビドー、現代の要素概念としての「精神力」「注意力」など（20）。

・精神過程を主体として扱うことの減少（26）

・仮言命題的、幾何学的方法の増加（28）

・統計的方法論の増加 (29)

・操作主義的説明の増加 (30)

・方法論への関心の増大、科学の本質、シンタックス
など方法論的な形式上の問題 (31)

・方法論的実証主義、これは、(27)(30)(31)と一緒にしたものである。これの普及 (32)。

五十年間の心理学研究の動向を以上のようにおさえたのち、ブルーナーは、各々の十年間の研究動向を時代状況と関連させながらのべている。そして最後の時代の二つの傾向についてつぎのように分析している。

・「社会的重要性」という脚光にあたることをさけ、

自然科学や現代論理学の厳密な方法にこだわることで、心理学を救済しようとする傾向、例、操作主義と生理学研究、動物研究

・人間の諸価値を考察し、社会的研究をおこない、日常生活の問題に適した基礎概念を求めようとする傾向

ブルーナーは、一九三八年代の傾向として右の二つを指摘したのち、この論文をつぎのようにしめくくっている。

「一九三八年という年は、大変劇的な形で将来の二つ

の選択の道を示している。端的にいえば、この道は『科学のための心理学』と『社会のための心理学』とよぶことができる。しかし、この名前は単に、心理学プロパーと応用心理学の間の選択とか、孤立主義者と社会参加派との選択を意味するものではない。なぜなら、選ばれた道は不可避的に、未来の精神科学 (mental science) のデザインー研究内容とともに、諸前提の性格、諸概念の体系性、理論の構造、技術の様式をも決定していくであろう。』とのべている。

ブルーナーらのこの論文とこの結論の部分でいっていることは、ブルーナーのその後の研究動向を探るにあたって重要な意味をもっている。なぜなら、この論文そのものの構成、ならびに、そこで見いだされた将来への見通しは、その後のブルーナーが自らの研究の方向を決定していく上で重要な役割をはたしていると考えられるからである。そこでどのような形で重要な役割をはたしているかを列挙してみよう。

ブルーナーはこの後、それぞれの時期において、自己の研究を含め、その時代の研究動向についての心理学評論をおこなっている。この研究はその意味で、その後のブルーナーの評論活動の基礎をなした仕事であったと

いうことができる。いいかえれば、この後、ブルーナーが、自分の研究をも含めて心理学研究について、方法論的視点から論ずることのできる研究者となっていく基礎がつくられたといってもいいのである。特にこの論文は心理学研究の全領域を視野の中に入れて、それらの中にある基本的な動向を明らかにしようとする試みである。こうした仕事はブルーナーの研究内容の幅の広さと、隣接科学領域の知見を心理学研究の枠組みにくみ入れようとする態度をつくりあげていったとみることができると。たとえば、文化人類学、言語学、論理学などの知見がのちのブルーナーの研究にはみられるが、それに対する関心は既にこの論文の中でみられるのである。

またこの仕事を通じてブルーナーが得た知見も、彼の論構成の仕方に重要な影響を与えている。その一つは、一九三八年代の心理学の動向として、また、それ以前の過去五十年の動向としてブルーナーが指摘した点である。それは、先に心理学の動向としてまとめた第四の点、「実名論」から「唯名論」へと研究が移行しているという点、そしてその動向は、「論理実証主義」哲学の影響によるものであるとした点である。ブルーナーのこの認識は、彼の言語心理学の研究、彼の教科内容論の論構

成にはっきりとあらわれている。全体的にみて、彼のこの後の研究においてブルーナーがとっている認識論は「唯名論」的なものである。

この仕事からえた知見が与えた影響の二つは、心理学研究と時代状況との関係である。この論文の結論部分のべているように、ブルーナーのこの後の研究は、つねに、「科学のための心理学」と「社会のための心理学」という二つの要請のもとで決定されている。つまり、ブルーナーの論構成―研究内容だけでなく、諸前提の性格、諸概念の体系的性、理論の構造、技術の様式―に右にあげた二つの要請にどう答えるかという点で決められているのである。たとえば、第二期におけるプロバガンダやオピニオンの研究は、明らかに「社会のための心理学」の要請に基づいてすすめられたものである。とはいえ、そのことはもう一つの「科学のための心理学」の要請を無視しようというものではない。なぜなら、第三期における「みえ」を研究した知覚研究は、社会的課題をもった問題に対し、実験心理学の方法を適用したものであるということができるからである。

四、第二期の社会心理学研究と

それを支える政治信条

この時期は、第二次大戦の勃発によって、ブルーナーが新たな研究の方向を志向した時期であった。その理由は、彼自身が青年層として戦争に参加せざるをえなくなったため、実験室での研究ができなくなってきたということと、それ以上に、ユダヤ人であったかれがこの度の戦争に積極的に参加する意義を認め、「社会のための心理学」という要請に積極的に答えていこうとしたからであった。かれの選んだ研究上の課題は、ナチス・ドイツにおけるパースナリテイ変貌の問題、それとナチス・ドイツやイタリア・ファシズムによるプロバガンダの分析、それらのプロバガンダによる世論形成の方法に関するものであった。(8) ちなみに、彼の学位論文は、ナチスの宣伝技術に関する社会心理学研究である。

戦後は、戦中時から継承されている世論分析を選挙制度、投票行動などについておこなうとともに、「社会のための心理学」の要請を国際的な科学研究運動として実現させようとしている。したがって、この時期のブルーナーの研究において、研究方法上の達成水準を示すのは、

世論研究の歴史において優れた著書の一つに数えられてゐる『世論と人格』（一九五五年、B. white, R. Smith）との共著）である。また、「社会のための心理学」の方向へとブルーナーを向かわせたブルーナーの政治的信条を語るものとしては、『民衆からの要請』（一九四四年）がある。ここでは、検討の対象を戦前の論文にしぼることにしたい。その理由は、研究上の論構成にしても、

「社会のための心理学」をめざすにあたってブルーナーが持っていた政治信条にしても、既に戦前の段階で基本的な枠組をつくりあげていたと思われるからである。その基本的枠組というのは、前者においては、有機体の構造をパースナリテイ構造としてとらえることである。また、そうした心理学研究が貢献する方向は、のちに明らかにするように、民主主義的な（民衆一人一人の総意に基づく）国際的な連帯関係をつくることであるという。

以下それらのことを詳しく論ずることにする。

一 プロバガンダおよび世論研究における論構成

まずプロバガンダ研究は大きくプロバガンダの送り手の内容に関する研究と、プロバガンダの受け手の変容に関する研究とがある。注(9)の(a)はドイツのアメリカ向け

短波放送の内容を分析して類型化を試みたものである。

これに対し、プロバガンダの受け手の反応を分析したのが(b)である。これはナチス宣伝映画「西部電撃作戦」(ドイツ情報局制作)を一三〇〇人のアメリカ人に見せた後、質問紙に答えさせた内容を分析したものである。

まず、(a)からみていこう。

ブルーナーは(a)の論文の目的をこうのべる。

(一)一連の社会的刺激を体系的に記述すること、そして世論の変化への予測の基礎を提供することができるよう、プロバガンダと世論との相関をみることは、社会心理学の中心の仕事であること。

(二)プロバガンダの変化と政治的潮流との相関をさぐり、最終的に予測が可能になるようにすること。

(三)様々なプロバガンダの比較(この論文で提起しているような分析の枠組をつくることが重要であること)

(四)プロバガンダの時代的推移を体系的に明らかにするために、前述の枠組が必要であること。

ブルーナーが提出した右の目的の中で、重要なことは、プロバガンダ自体の内容分析、それが生れる時代状況との関係、プロバガンダの変化の特色といった点を明らかにするための分析枠組をブルーナーが作ろうとしていた

ことである。そしてもう一つは、これらの研究から、将来を予測し、社会への勧告としようとしていた点である。なぜそれらが重要かといえば、最初の点は、有機体と与える刺激要因を単に抽象的な「刺激」として捉えるのではなく、現実の状況の中の文化の構造として捉えようとする視点が既にみられるからである。また後の点は、「社会のための心理学」をめざすブルーナーにとって当然の帰結といってもよいものである。

ではブルーナーはこの研究で右の目的達成のためにどのような分析の枠組を立てたのだろうか。

(1)分裂―統一次元、人々の間に分裂と対立を起すためのもの、これはつぎのような方法からなっている。

a 習慣的情報源への信頼をこわす。これは、主として新聞、ラジオへの攻撃になる。

b グループ間の対立を策す

c 民衆と指導者との対立を策す

d 危機状況を誇張する

e 罰の感情を刺激する

f 第五列(裏面工作により敵を援助する)の恐怖をひらげる。

g 運命論を刺激する

h 「恐怖の戦術」

(2) 否定→肯定次元

第一の方法は、アメリカにおける言及の仕方によるものである。

a アメリカ合衆国との関係でイギリスをそしめる。

b アメリカ合衆国との関係でドイツをほめる。

c アメリカ合衆国、その伝統、市民、制度行動をほめる。

d・cの反対の場合で、非難する場合、第二の方法は聴衆への「圧力」を分析する。

1 否定的環境圧力。これは二つのグループに分れる。

a 人間への否定的環境圧力、批判されるべき(ナチスからみて)筆者注) 環境への聴衆の対応の仕方や態度を讃め、批判し、あるいは論評する。例・「アメリカ人が、中央にいるユダヤ人達の活動を非難するのはよいことだ」

b 状況への否定的環境圧力、批判されるべき環境に対し、聴衆がはっきりした態度をとれないような状況を批判する。

2 肯定的環境圧力、これも二つに分れる。

a 人間への環境圧力、賞讃すべき(ナチスからみて) 環境に対し、聴衆がとっている態度や反応を賞讃し、批

判し、論評する。

b 状況への環境圧力、非難すべき環境に対し、聴衆が明確なかかわりをとらないような状況を推賞する。

3 否定的自我圧力、環境への聴衆の態度や主張をさして、聴衆を非難する。

4 肯定的自我圧力、3の逆の場合

5 環境型

a 英国連繋型環境、アナウンサーがイギリスと明確に関係の深いアメリカの環境を批判したり、ほめたりする。

例・アメリカの報道はイギリス外務省の手先だと批判する。

b ドイツ連繋型環境

c 生来のアメリカ型環境

6 個人的圧力、聴衆について語る。

7 環境についてのみ語る。

第三の方法は Altmark () の材料を分析し、そこにおける批判的・正当づける項目を明らかにする。

第四の方法は第三の素材で使われる用語が情動的であるか、中立的であるかをみようとすることである。

(3) 時間的次元

a 漸次的攻撃の方法

b 政策的ペースメーカーキング、ナチスの侵略のペースに
合わせて放送の方法を考える。

(4)個人―非個人の次元、プロパガンダを個人的なものとして内面化させる方法

(5)階層―同質の次元、経済、文化、人種、職業上の階層を考え、それに価値序列をつける。

(6)権威―略礼の次元、自己の宣伝に枠組を与える。例・
発言者の権威性、見撃者の権威性。

(7)方言の使用、受け手の言語習慣に合わせた言語使用をする。

(8)直接、疎遠の次元、テーマを身近な現代的なものにするか、伝統的なものにするか。

(9)反復の次元、プロパガンダの定着をねらう。

以上の次元は、相手の態度変容をうながすためのプロパガンダ（社会刺激）を分析する基準である。この九個のカテゴリーは、プロパガンダと世論の相関関係を知るための一つの段階として、社会的刺激を体系的に記述しようとしてつくられたものである。しかし、体系性という点からみると、この九つのカテゴリーは論理的に十分整理されていない。たとえば、カテゴリー相互の関係が

あきらかではない。九つのカテゴリーが各々別々の分析カテゴリーだとしても、はたして九つのレベルで分析することが、プロパガンダの全体構造をとらえたことになるのか、またとらえたとしてもなぜそうなるのか、という点についての説明がない。つまり、カテゴリー設定の理論がないのである。

また、右のカテゴリーは、社会心理学的にみて整合性に欠けている。たとえば、(1)分裂―統一次元のカテゴリーは、プロパガンダの目的という観点から立てられたものである。それに対し、(2)や(3)(4)(5)等、説得のための修辞法に関するカテゴリーである。そしてこれらの中には、説得術として慣習的に定められたものもあれば、その効果が心理学的に立証されたもの（たとえば(9)）もある。以上のように、社会的刺激を分析するための「体系的カテゴリー」は、決して理論的水準の高いものではない。

しかし、ここで注目すべきことは、世論変容のための戦術として、社会刺激内容を分析しようとしたことである。つまり、一定の社会刺激を与えることによって、受け手の態度変容をうながすことを広い意味での教育作用とよぶならば、この分析は、送り手の教育内容・教育方法―政治教育の内容・方法―の分析であるといえよう。とは

いえここでのブルーナーの研究をのちの教育研究と結びつけることは明らかに短縮的であることはたしかである。しかし、ブルーナーが受け手（学習者）に与える社会刺激の内容・方法とその効果に関心を向けていたことは、軽視すべきではない。なぜなら、いかなる刺激を用意すれば、予想される変容を学習者に生じうるかという問いは、教授論における最も基本的な問いだからである。

しかし、この論文では、社会刺激による世論の変容は問われていない。さらにまた、社会刺激による変容の対象も、「世論」であって、個人としての「学習者」ではない。この点での変容が問われるためには、「ペーソナリティ」の概念が入らなければならないのである。

先の論文との関連において世論の変容を問題にした論文としては、(b)がある。ここでは、ナチスの宣伝映画鑑賞後の反応パターンを(一)交戦的、(二)受容的敗北主義、(三)杞憂的、(四)無関心の四つにわけ、さらに各々についてサブ・タイプを分けて分析している。そしてこれらの分析結果に影響を与えた受け手の側の条件について、かれは三つの仮説をあげている。(1)三つの一般にみられた反応パターン（受身的敗北主義以外）は、テロ、プロバガンダに接して無力感に墜ち入らない様、抵抗している（怒

る。嫌う。無関心を示す。(2)干渉主義の方が孤立主義より、抵抗する傾向が強い。(3)ハリウッド戦争映画の技術水準が高いので、ナチスの映画に迫力を感じない。それが抵抗感を高める。ブルーナーの右の様な考察では、未だ受け手の変容過程についての、さらには受容機制についての理論はみられていない。

それに対し、(c)の論文は、ナチス体制化の様々な社会的圧力の中で、ペーソナリティ変化を扱ったものである。分析の対象となった資料はナチスの弾圧を逃れて亡命したユダヤ人から、亡命に至るまでの体験記録で、これは懸賞論文として募集したものであった。この体験記録を分析するにあたってブルーナーらは（ただし、この研究のチーフはG・オルポルトである）十八項目の資料整理の視点を提出している。例えば、ユダヤ人として身元を明らかにされた日、ナチスに対する態度の変化、活動の諸局面で生じたフラストレーション、その原因など、亡命者の体験記録についての右の整理にもとづき、つぎの問いを設定する。

(一)、迫害された人々は、破滅に対して心理的にどのようになり自己防衛しようとしたか。(二)、社会の破滅的な混乱は根本的な人間的統合をどの程度おびやかしたか。(三)、

破滅の圧迫のもとで政治的態度はどう変わったか。(四)、極端なフラストレーション状況でどんな反応をしたか。

(五)、迫害者の心理状況どうであったか、この五つの問いの中で(一)と(二)が受けての受容機制的分析として重要であろうと思われる。問(一)の答えとしてこの論文はこうまとめられている。(1)、永続的目的追求は不可欠の基礎条件である。守るべき家族、教育を受ける子ども、仕事のこと、友人のこと、要するにパースナリティ構造の保存と生活上のすべての主な価値には強さが必要であること。(2)、そうした諸々の目的追求には構造化された場の把持が必要であること。大人の場合、枠組、価値、支持すべき習慣の激変ははっきりした抵抗に会うこと。(3)この抵抗の要因の一つは親しさの索引力であること。ここには二つの相互に関連する機制がある。一つは親しい物や事柄に付随する刺激で行動が偶然に強化されること。もう一つは真の親しさは積極的価値をもっていることである。(4)抵抗は無意識的防衛機制的働きで促進される。以上、問い(一)に関する答は、いずれも外的条件の激変の中でパースナリティ構造の持続性、恒常性を指摘することができることを示している。同様に問い(二)の答へも(一)と深く関連している。つまり、「この事例資料から分析者達がえた最

もなまなましい印象は、個人のパースナリティの並みはずれた連続性と同質性である。」またこうもいっている。「政治態度(ナチへの極端な反対)の強化や判断や評価の諸基準についての認識や批判が成長しつつあったにもかかわらず、パースナリティの基礎構造としてそれとともに、確立ずみの目標、根本的な生活観、技能、表現行動は変わらぬまま、変化があるとしても、それはパースナリティの基本的統一を破壊するものではなく、既にある特徴の中から選択し強化するのである」。

この指摘と関連してもう一つ注目すべきことは、権力をもつ多数派と、圧迫され、欲求不満をもつ少数派の二極的分裂の過程において、「少数派はある程度、現実逃避的活動にふけることはあったが、同時に計画する能力、発明する努力も鋭くなっていたことである」。いいかえると、フロイト流の欲求不満→攻撃という仮説における代償行為だけではなく、かなり計画的、問題解決的態度も深化しているということである。

以上、三つの論文からブルーナーの初期研究における基本的発想として集約すべき点をあげることしよう。(一)全体的研究方法としては、社会的刺激条件(プロパガンダはその一つ)と学習主体(例・世論をもつ人々、あ

るいは集団、パースナリティ)との相関を厳密に(相互の因子を明確に規定する形で)研究すること、そして最終の目的として予測を与えること。この点についてブルーナーの態度は大変積極的である。たとえば、(b)の論文の終りにあたって、ドイツの政治宣伝に対し、逆宣伝の方策を各々の反応タイプに応じて工夫すべきことを主張している。(c)の論文は当時の政治状況や、この中で彼が政府機関に籍を置いていたことからして、政策科学的色彩が強い。特に論文(b)においては戦時下の軍事産業の拡大と産業防衛からある地域に集約していた人口を戦後の平和産業体制へと失業や混乱もなく、移動させるために、人口移動への予測がおこなわれている。ここで、ブルーナーは、マーケティング、リサーチの手法を用いている。この論文の結論でブルーナーはこうのべる。「人口移動は事実先だつてゝまさに戦後計画の一助として研究されるべきである」。ここに、「社会のための科学」、「社会のための心理学」をめざすブルーナーの研究への姿勢と科学者の社会的役割に対する認識をよみとることができさる。

(二)(a)では社会的刺激の一つであるプロパガンダを送り手の立場から分析し、その戦術パターンを研究したこと、

また(b)ではプロパガンダに対する受けての機制の側から問題にしたこと、さらに(c)では、極限状況における様々な社会的刺激条件の中で、パースナリティはある種の恒常的構造をもっていること、そしてこの構造はその人間において追求すべき永続的目的があるか、またそれを実現する場があるかによって決定されるということが明らかにされた。そして、以上の(a)(b)(c)その他の論文において、ブルーナーの研究は、現実の問題に対する勧告を提供するという姿勢につらぬかれている。それらは、いずれも記述的な分析研究ではあるが、どの場合にも、どういふ戦術を加えれば受け手の態度変容に最大効果をあげられるか、また逆に様々の否定的な社会的刺激に対し、受け手が自己防衛を働かすことができるか、パースナリティ機制の保持はどうすれば可能かという課題が提出されていったといえる。

たしかに、以上の三つの論文において、送り手の側の分析、受け手の側の分析が同時に扱われていない点は理論の上で未熟であることをまぬがれない。パースナリティの恒常構造の指摘にしても、一つの論文の中でどのような社会的刺激に対して、その構造の保持がみられたというようには考察されていない。したがって、現実の課

題に対する勧告を提出するという姿勢にしても、研究方法の上で、操作的な、つまり実験的な手続をとってはいない。それにもかかわらず、教育問題を扱うにあたって立てられなければならない最も基本的な枠組は、ここにおいて用意されたといえる。もちろん、このことはブルーナー自身がそれを教育問題を扱う際の基本的枠組であることを意識したことを意味するものではない。しかし、受け手に一定態度変容を期待するために、どのような社会刺激を用意すればよいか、その際、受け手（学習者）の受容機制（パースナリティ）をどのように理解すべきかという問題設定は、教育問題を扱う基本的枠組であることはたしかである。

(三)さらに、右の枠組で注目すべきことは、第一に受け手の構造を独立変数としてとらえていることである。社会的刺激は直接パースナリティに影響するのではない。パースナリティの既有的諸特徴の中から選択し強化する。いかえれば、パースナリティ構造がそれらの諸刺激を取捨選択する機制をもっているのである。第二の点はこの機制がフロイト的な「防衛機制」としてのみ説明されるのではなく、「問題解決」のための、プランニングのための積極的構えとして説明されていることである。

なぜこの二点が注目すべきかといえは、教育の理論を考える際に前提にさるべきことは、学習者の認知構造であり、その認知構造が情報獲得にあたっていかなる働きをなすかということだからである。ブルーナーは、学習者の認知構造に関する研究をのちに展開している。そうした研究の基本的枠組がすでにこの時期に提起されているといっでよいであろう。とはいえ、こうした枠組がブルーナーのオリジナルであると考えすることはできない。むしろ、共同研究者G・Aオルポートの影響という方が正しいであろう。なぜなら、論文(b)と(c)を比べると受け手の分析視点が(c)に比べて(b)はまことに単純だからである。

(二)世論研究における政治的立場と教育観

ブルーナーの心理学研究の系譜からみれば、一九四七年以前の研究はさほどその後の研究と関連性がないといっでよいだろう。なぜなら、社会心理学の研究に限定したとしても、その後の論文において前研究を継承しておらず、引用されていないからである。¹⁰しかし、教育問題に関するブルーナーの一九六〇年代の見解をみると、第二期のブルーナーの政治的発言や教育に関する見解を理解する必要があると思われるのである。なぜなら、

この時期のブルーナーの研究は社会心理学とはいえず、世論研究のこの当時の水準からいえば、社会学と区別されるのに十分な心理学的概念構成をもっていたとはいえなかったことと、この当時の状況（第二次大戦中）からして、研究の目的も、かなり社会的効用性を考慮して設定されていることから、方法的検討の対象としてよりも、思想的表明の対象として分析した方が適切であると思われるからである。この時代のブルーナーの政治的立場を検討するもう一つの理由は、一九六〇年代に起ったアメリカの政治的变化に対するブルーナーの反応を理解するためである。この時、ブルーナーはつねにリベラルな立場からケネディ路線に従い、かつ黒人暴動等ののちは、人種差別に反対し、アメリカ教育制度のひずみへの批判的態度をとり続けた。こうした政治的立場の原点をこの初期の研究の中にみることができると思われるからである。

そこでここでは、一九四四年に出版されたブルーナーの最初の著書『民衆からの要請』(The mandate from the People)を、まずとりあげよう。⁽¹⁾この著作はギャロップやフォーチュン等の世論調査の資料(この著書ではじめて公開されたもの)を使って、イギ

リス、カナダ、オーストリア、アメリカの世論、特に国際問題、第二次世界大戦をめぐる世界の平和と戦争に関するさまざまな問題についての「民衆」の考え方について分析を加えたという点で本書はのちの研究と全く無関係ではない。つまり世論分析の基礎技術を使っているという点で。しかし社会心理学的な方法論のレベルではこれはあまり関連がないといってよい。本書において考慮の対象にすべきものは、彼の社会的、政治的な立場であり、民主主義の観念である。それは次の理由からである。のちに(一九六〇年代の後半)黒人暴動などをきっかけにアメリカ社会において政治体制そのもの、またその一部である公立学校制度のあり方が多くの人々によって問いなおされたとき、ブルーナーもまた「貧困と子ども」という論文の中で公教育制度を批判したが、彼のそうした見解とこの著書の中での彼の立場との間には、基本的な共通性をみいだしうるからである。

「これは未来、つまり平和についての本である」⁽²⁾とブルーナーはいう。そして「これは『人民』についての本」⁽³⁾でもあるという。ブルーナーは序論の中で自己の政治理念を開陳する。民主社会では、選挙が民衆の意見を反映することになっているが、民衆の意志が反映され

る他の、もっときめのこまかい手段がある。新聞や議会に投書したり、集会を開いたり、デモをすることである。民衆はこれによって世論の傾向 (opinate) を形成する。政治家や利益代表者たちは未来を形成するかも知れないが、それを豊かなものにするのも、貧困なものにするのも民衆の世論である。つまり民衆が未来を実現するのである。リンカーンがいったように「私が望むことは、国民が実行してほしいと願うことだ、私の課題はどうすれば、それを正確に把握するかだ」⁽¹⁴⁾。しかし皮肉なことには、国民の願いを発見するのは困難なのである。しかし幸い、世論を測る科学的方法が発見され、右のことが比較的容易になった。したがってこの著書の目的は、世界の多くの人々が第二次大戦についてどう考えているかを、科学的に洗練された世論調査を使って分析することである。いいかえれば、これは「民衆からの要請」を分析することなのである。そしてブルーナーはこの分析について次のことをつげくわえる。つまり、この世論調査の分析は、一部の団体や利益代表者のグループを分析するといったものでないということである。

この著書の構成は二つに分かれ、前半は平和をめぐる国際問題についてのアメリカ世論の動向、後半は戦後の

国内問題についてである。本書の内容についてのくわしい分析と紹介はさけるが、この本におけるブルーナーの政治的立場は明らかにしておく必要がある。

まず第一に前にものべられていたように、民主政治は民衆の意志によって営まれていかなければならない。そして第二に国際平和が達成されるためには、アメリカの世論は孤立主義者に対して国際主義者にならなければならぬ。「もしわれわれが合衆国の市民であるのと同じ熱意で世界市民にならなかつたならば、一九三三年から今日世界が到達しえた時節を迎えることだけはしなかつたであろう」⁽¹⁵⁾。したがって第三の点としてブルーナーの強調点は、世論を分析の対象としてだけではなく、民主主義的な平和な国際社会の一員であるために、アメリカ世論をどう形成すべきかが問われるということである。そしてブルーナーは前述のような項目について分析を加えたのち、最後の章で民衆の本質は何か、そしてその民衆の中に民主的で望ましい世論を形成するにはどうすればよいかについて述べている。

「民衆は天使でも悪魔でもない。・・・民衆はつねに成長している。・・・民衆とは常識であり、自分達の未来へのヴィジョンをもち、過去に愛着をもち、現在に没

頭する人々である。アメリカ人は空論をきらう。それは常識とは無縁のものだからだ。大きな国際問題や国内問題を考えるとき、理論家のようには考えない。民衆は具体的なのである。民衆にとって戦争とその原因は抽象的な軍事的・経済的ゲームではない。戦争とはだれかが悲しむことであり、息子が徴兵されることである。戦争は死傷者のリストであり、生活が破壊されることである。そして平和は高雇用水準理論でも国際的執行組織でもない。平和は職にありつけ、人々が武器なしに、会議のテーブルを囲んで意義のある決定することである。平和は子どもを持って学校に入れ、土曜日に田舎へドライブに出かけることである。民衆は世界をこのような具体的なことばでみきわめる。・・・民衆が大きな問題に理解を示さないのは、国際貿易と田舎でのドライブの関係がわからないからであり、マライ半島のすずとだれかが悲しむこととの関係がわからないからである。(16)と。ブルーナーは民衆の思考の仕方をこのようにのべ、民衆を啓蒙する方法についてこう提言する。「未来へと挑戦するためには、これまで『国家の業務』とされ、小教者の責任であると思なされてきたことに民衆自身の運命がかかっていることを自覚させることである。われわれの心の奥

ではわれわれが戦う理由、われわれが欲するものを知っている。これもわれわれの常識である。くり返しようが、それは空論でも、イデオロギーでもない。われわれは自衛のために戦う。その通り、しかし、うまくいえないが、『もの道理』というような常識を実行するためにも戦う。・・・これがアメリカの日常生活の構造であり、自由と個人と幸福を追求する機会なのである。

(だから)世界の複雑さを経験の具体的コトバに翻訳できれば、われわれの常識はそれを理解できるのである。時として民衆がそれを理解できなかったのは、新しい問題を古い思考方法に翻訳できなかったからである。(17)そしてブルーナーは民衆を賢くする方法を具体的に、現代の科学技術が支配する社会の中で考える。「新しい諸問題、戦後の国際問題は以前よりますます複雑化し、抽象化されるであろう。技術は生活を容易にしたことは確かだが、同時に、生活をはてしなく困難にもしてきた。われわれは職人の安堵さや田園の静けさも奪われた。レジャーと失業は新しい技術の結果である。われわれは前者を賢明に活用しながら、後者を抑制することを学ばねばならない。・・・未来からの挑戦は実のりある世論に支えられた民主主義を維持することであり、同時に現代生

活の増大する複雑さの成果を享受することである。もし大量生産や科学の驚異によって、個人の創造性が窒息させられたり、『経営エリート』に従属させられたりしたら、技術上の発見も無益なものになってしまふだろう。さらに国際的な安全と協力の体制をつくりあげることによって、人間の運命を支配する政治機構が個人のとうてい統制できないものになってしまつたら、最終的には、勝負に勝つたとはいえないだろう。技術にしても、国際主義にしても、民衆の力でそれをかちとるようにしなければならぬ。・・・それはきつい、苦痛としばしば絶望にも似た努力を通してえられるのである。(18) ブルーナーはこのようにのべ、現在(当時)平均人「the common man」といういい方がなされ、民衆を固定的に把握しようとする傾向があることを批判し、民衆が自己の責任を回避することなく民主主義を維持すべきことを主張する。そして次のような文でこの著作をしめくくっている。「もし未来が輝やかしいものでありつづけるためには、二つの条件が満たされなければならない。まず第一に市井の人々に絶えず知らしめること、正直に、常識のコトバで知らしめる努力をしなければならぬ。しかし重要なことは、民衆が自分の意志を感じとる方法

を改めなければならない。国内問題、国際問題を処理するのに町議会まで降すことはできないが、民主主義が生きつづけるには、その精神をたえず捉えなおすようにしなければならない。民主主義を生みだすのは民衆であり、民衆の要求は絶えず聞かれなければならない。(19)

五 おわりに

ブルーナーの研究経歴の第一期、第二期はその後の研究経過からみれば、一見、後の研究と関連のうすいものであるようにみえる。たしかにブルーナーが心理学者としての評価をうけるようになるのは、第三期、知覚の社会心理学研究に入ってからである。またブルーナーの諸論文を集めた著書(*Going beyond Information given Norton 1973*)でもこの時期の論文は省略されている。

しかし、以上みてきたように、ブルーナーの研究に対する視野の広さ、論構成への関心、論構成の内容と重要な点からみたとき、この第一期、第二期の研究はきわめて重要である。さらに、ブルーナーの後の教育についての発言などとの関連を考えると、ブルーナーの社会問題

や教育問題についての価値的な立場はこの時期の政治信条を明らかにすることは重要である。それらの立場の基礎はこの時期に形成されたといっても過言ではない。

(未完)

注

- (1) J. Fex, *Esistemology, Psychology, and Their Relevance for Education in Bruner and Dewey, Educational Theory, Vol.19, Winter 1969, pp.58-75 or E. L. Young, Dewey and Bruner: Common Ground? Educational Theory, vol.22, Winter 1972 pp.58-68 77*
- (2) ジャン・ピノジエ著、芳賀純訳、'発生的認識論' 評論社、昭和四十八年 六三頁参照
- (3) J. S. Bruner, *Needed: A Theory of Instruction, Educational Leadership, vol.20, no.8 August 1963, pp.523-532*
- (4) この年代史的分類は必ずしも厳密なものではない。とうのは第二期と第三期の区分は困難であり、以上のように分類したところでもかなり重複がみられるから
- (5) J. S. Bruner, & Cunningham, B. The Effect of Thymus Extract on the Sexual Behaviour of the Female Rat. *Journal of Contemporary Psychology* vol. 27 1939 pp.69-77
- (6) T. L. McCulloch, & Bruner, J. S. The Effect of Electric Shock upon Subsequent Learning in the Rat. *Journal of Psychology, vo. 7 1939 pp.333-336*
- (7) J. S. Bruner, & Allport, G. W. Fifty Years of Change in American Psychology, *Psychological Bulletin, vol.37, 1940 pp.757-776*
- (8) この時期の論文の分類としてみると、フロム・ガンダの分析に関するもの(博士論文を含めて)(4)'世論研究に関するもの(2)'研究方法論に関するもの(6)'ハー

スナリテ、に関するもの③、その他②、世論研究の著書(1)となる。これを年代別にならべてみると、フロムガンの研究は四十二年頃まで、世論研究は四十二年から、四十六年まで研究方法に関するものは、四十六年から四十八年まで、これは知覚の研究と重複しており、ノースナリテ、に関するものは体系的には四十八年以降である。

- ⑥ The Dimension of Propaganda: German Short-wave Broadcast to America. *Journal of Abnormal Social Psychology*, vol. 36 1941
- ⑦ (with G. Fowler), The Strategy of Terror: Audience Response to Blykriek. *Journal of Abnormal Social Psychology* vol. 36 1941
- ⑧ (with G. W. Alport & E. M. Jandorf) Personalilty under Catastrophe: Ninety Life-histories of Nazi Revolution, Character and Personalilty vol. 10, 1941
- ⑨ How much Post-war Migration?

American Journal of Sociology, vol. 49
1943

注(8)参照

- (1) ホワイトとスミスの共著『世論と人格』の中で、一九四六年 G. J. S. Bruner & Korchin, S. J. The Boss and Vote; Case Study in City Politics, *Public Opinion Quarterly*, vol. 10 1946 pp. 1-23 を引用されているだけである。
- 一九七三年、ノースナーの論文集 *Beyond the Information Given: Studies in the Psychology of Knowing*, (Norton) が出版されたが、その中にフロムガンの世論研究が入っている。
- ⑩ J. S. Bruner, The Mandate from the people, Duell, Slodn & Pearce 1944
- ⑪ *ibid.*, p. 3
- ⑫ *ibid.*, p. 7
- ⑬ *ibid.*, pp. 223-227